

2018年
10月号

夢に向かう家

今回のご紹介は、勝山南の城塚さんのお住まい。2階建ての長屋の角地で、独立した1階部分を借り受けておられます。建物自体は築50年以上ですが、壁、床、キッチン、トイレ、浴室まで全て一新されていて、その歴史を全く感じさせません。

城塚さんは、9月号の「ピックアップものづくり百景」で紹介した「切子ガラス工芸研究所 たくみ工房」で働く切子職人さん。大学卒業後は故郷の広島で就職していましたが、ある時、たまたま訪れたデパートの食器売り場で切子と出会います。その輝きの美しさに目を奪われた城塚さん。切子の工房探しが始まり、辿り着いたのが「たくみ工房」。それ以来、週末は夜行バスで広島の家と工房を行き来し、切子の技術を磨く生活が数年続いたとのこと。今年、工房のスタッフとしての採用が決まり、生野のまちに住むことに。

お住まいを探すにあたって、最も気にしたのが「音」だと言います。自宅で存分に制作に打ち込める環境にこだわり、この家に辿りついたとか。

「ガラスを削るときは意外に大きいんです。音の問題をクリアできて、費用もなるべく抑えて、工房近辺で…と地元の不動産屋さんをお願いして、一軒家の賃貸を探しました。」と教えてくれました。

お住まいに置かれたほとんどの家具は手作りによるもの。こちらに住む前から、よくDIYをしていたそう。「将来的なことを考えて、家の中の荷物は最小限にしようと。DIYで作った棚は、運ぶときも解体ができるので便利です。」と話す城塚さん。玄関にある自作のパーテーションは、入ってすぐのキッチンに隠す役割と、ダイニングとキッチンの間仕切りを兼ねて作られています。また、外出時に必要なものを置くラックとしても活用。その圧迫感のない作りとナチュラルな木の色により、部屋全体をすっきりとした印象にしています。

奥の部屋はご自身の作業部屋として使用し、ここにも作業台と収納を兼ねた自作の棚が。こちらは以前のお住まいから使われていたもの。



切子細工に必要な工具などがきれいに収まり、快適に作業するための工夫が施された“オリジナル”の空間。

音も気にせず制作に没頭できる時間をこの家で手に入れた城塚さん。

「仕事を辞めるには勇気がいったけれど、本当に好きなことを仕事にできて、家でも制作活動に打ち込めるこの生活にとっても満足しています。」と清々しく微笑むお顔からは、自分の決めた道を突き進む、迷いのない充実した日々がうかがえます。た。



2018年
11月号

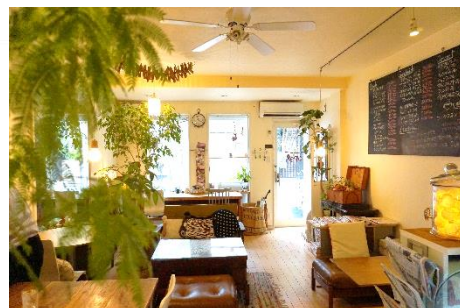
家族の絆と訪れた人の温もりが 刻まれた心安らぐ場所

疎開道路から少し西へ入った勝山地区の路地で、周りの住宅に溶け込むように佇むカフェがあります。三軒長屋の真ん中で、1階を店舗、2・3階を居住スペースとされている岡本さんのお住まい。購入時、築40年以上経っていた家屋は、すでに何度カリフォームされていて、手直しの必要はなかったそうです。

カフェ経営の夢をあたためていた岡本さんですが、当時、学生だった娘さんからの「この家でお店したらいいやん」の一言が後押しとなり、入居数年後に、ガレージと一部居住スペースだった1階をカフェ仕様にリノベーションされました。“生活の場”と“働く場”が同じところがメリットだとか。

大きな改装も、カフェ経営も初めてのことだらけでしたが、ご家族が全面的に協力してくれたそう。予算の都合上、自宅用玄関は作らずに、カフェの出入り口と兼用する形に。お子さんが、お客さんの横を通って家を出たり入ったり。「いってらっしゃい」「おかえり」「大きくなったね」の言葉があたたく飛び交っていたそうです。「お客さんにほっと一息つける場所を提供しようと思っていたのに、反対にお客さんから私たち家族の心あたたまるところをいただいた気がします。」と教えてくれました。

お客さんからの『ごちそうさま』『ありがとうございます』『また来るね』、そんな言葉が“お店をしてよかった”と心から思える瞬間だそうです。



「ひとりではできなかった。家族の応援や、家族ごと見守ってくれる温かいお客さんのまなざしがあったからこそ、これまでやってこれました。」と感慨深げに微笑む岡本さん。柔らかな日の光と緑が溢れるこの空間には、訪れた人が思い思いの時間を過ごせる穏やかな時間が流れています。



2018年
12月号

クリエイティブな明るい我が家

第7回目の今回は、舞台美術スタッフの木村さんのお住まい。3軒ほど連なる長屋の端、角地にあるご自宅は、町並みに溶け込んだ外観と打ってかわり、かなり個性的な室内。想像を裏切る開放感にまず圧倒されます。

入ってすぐの吹き抜けをはじめ、各所から惜しみなく光が差し込みます。さらに、庭付物件のメリットを最大限に活かしたサンルームは、光を取り込むことはもちろん、室内に居ながら外とのつながりを楽しむ“くれ縁”（外とはガラス戸で仕切られた縁側）として、いつでも庭を望むことができます。

芸術大学に通っていた経歴を持つ木村さん。演劇との出会いから現在の職業である舞台美術の世界へ進まれたといいます。「建築自体を学んだことはないんですが、舞台制作を通じて建築に触れる機会をもらいました。」とのこと。リノベーションにあたっては、大胆にも内装を全て取り払い躯体だけの状態にして、設計図を作らず、建築的なセオリーに縛られずに「思うがままに作った」と語ってくれました。



▲ 桃谷地区の北部にある木村さんのお宅。入り組んだ道が多く、「一見さん」にはあまり知られない場所。反面、行き交う袖が触れそうなこの距離が、住民同士のコミュニケーションを自然に生み出す人情味あふれる場所。

その結果生まれたリノベーション後の室内は、壁を取り払うことで一続きの大空間としつつ、床材の張り方に変化をもたせることで、元の各部屋の独立性も残しておられます。味のある家屋、光さす吹き抜けなどモダンなアイデア、そして、日本家屋の伝統的な味わいがうまく混ざったお住まいから、芸術家としての感性の鋭さや妥協しないストイックさを感じる木村さんですが…。

「貧乏性なのか、ごみだと思っても廃材を捨てられないんです。廃材を利用しようと、4匹いる猫のためにキャットウォークを作りました。でも1匹しか上がってくれないんですよ。」と穏やかに話す木村さん。「次は妻が作るこけしの作品を飾る棚を作りたい」というお言葉と、くつろぐ家族が目につくお住まいから、木村さんの家族を大切に想うお気持ちを強く感じました。

